

原子力談話会趣意書

今年の3月に突如として原子炉予算が出現して以来、日本の原子力をめぐる事情が急速に進行していることは争実であります。しかも、原子力研究開発に対する明確な基本方針さえ定まらぬうちに既成争実がつぎつぎと作りあげられてゆく現状であります。

この4月の学術会議総会で決議された原子力問題に関する声明にもあるとおり、原子力が日本国民の福祉に役立つよう、その研究がわが國に正しく根をおろして発展するためには、その研究が軍事目的に利用されるべきでないことはもちろん、研究には絶対秘蔵がないことが必要であり、また研究者は原子力研究のゆえに何らかの制限を加えられるようなことがあつてはならないし、あくまで日本人の自主性にもとづいて行われねばなりません。

世界の原子力開放の圧力が、原子爆製造によつて非常にゆがんだ形で進んできた上に、とくに広島長崎しかもビキニと三度も被害をこうむつたわが國は、この原子力の問題に対して慎重であるべきは当然のことであり、したがつて上に述べたような原則は最低限不可欠のものと考えます。

しかも現在では、通産省の原子炉予算打合会は当面の予算の用途のみを問題にしており、根本的な問題については内閣の原子力利用準備調査会に全くゆだねられていて、その調査会が、こういった原則の確立に対してまだ少なくとも表面には、積極的な動きを示してありません。こういうなかにあつて、打合会をめぐつて既成争実が先行している現状は全く残念なことであり、われわれ一般の研究者は原則の確立に大いに努力をしなければなら

査会が、こういった原則の確立に対してまた少なくとも反面には、積極的な動きを求め、
おりません。こういうなかにあつて、打合会をめぐつて既成事実が先行している現状は全
く残念なことであり、われわれ一般の研究者は原則の確立に大いに努力をしなければなら
ないと考へざるをえないのであります。

この8月、学術会議の原子力問題委員会の委員等の個人的な援助などをえて、原子力の
問題に関心をよせる若い研究者が集まつて、基礎的な勉強を中心としながら、わが國の原
子力研究のあり方や、それに対する態度などについて討論する機会をもちました。この勉
強や討論は参加者の全く自主的な活動であります。そして結論として、上にのべた学術会
議の声明の趣旨の実現に努力することを約し、そのためには、学術会議を一層強く支援し、

また地域的にも専門的にも広い層の研究者が互いに連れいしてその結びつきを強くし、
また一般の國民との結びつきの強化にもつとめ、原子力問題について正しい判断ができる
よう充分な情報交換や意見の交換によつて啓蒙しあふことになりました。そのため先の勉
強と討論に参加したものはかりでなく、広く全國の研究者によびかけて、組織を強化する
ことに意見が一致しました。

この結論にもとずいて、このたび原子力談話会を作るはこびになつたのであります。上
のような活動に理解をもつ研究者の積極的な参加と協力を期待いたします。

1954年 の 月

原子力談話会設立世話人一同。